

結局ブラック企業

三上 櫻子

もう十年も前のことである。私は経理学院とパソコンスクールに通い日商簿記二級とパソコン検定二級の資格を取得した。そして事務経験を五年積み新聞販売店を顧客に抱える会社へ就職した。その会社はプログラム開発と事務業務や印刷業務を行う方とに分かれていて、それぞれの社長がいた。私は事務業務等を行う方に応募して採用となった。それまでの事務仕事とは違い慣れるまでが大変だった。特に印刷業務はイラストレーターができない私には大変な作業だった。イラストレーターはできなくても構わないという事で採用になったのだが、私にはワードの図形描画しかできないので未知の世界だった。

少なくとも新聞販売店を顧客に商品の受発注や請求書の作成、チラシなどの印刷等が私に与えられた仕事だった。男性社員ばかりを雇い続け女性を雇うのは私が初めてだと聞いていた。その理由はすぐ分かった。女の私には特に印刷の業務は重労働だった。トナーを入れ替える度に二十キロ程の重いカートリッジの入れ物を上げ下げするのは重労働だった。印刷が終わったら段ボールに入れて梱包して発送した。夜九時頃まで残業してフラフラになって帰るのはごく当たり前だった。一日で嫌になったが辞める訳にもいかない。五十代半ばという年齢では、すぐ次の就職先を探すのは至難の業だ。ここで頑張るしかない。必死で仕事を覚えがむしやりに働いた。ところが私は印刷業務が続いているうちに腰を痛め、腰をかばっていたら膝まで痛めてしまった。会社帰りに毎日のように整骨院に通っていた。とにかく頑張るしかやるしかないのだ。私は身を粉にして働いた。へこたれてはいられなかった。

その仕事に就く以前、私は家庭内でのことで精神的に不安定になり、月に一度病院に通っていた。通院して徐々に体調も良くなっていった。原因は家庭内にあるのでむしろ外へ働きに出た方がいいよと主治医に言われた。知人の紹介でその先生に診ていただき、私はその先生を見ているだけで励まされ、みるみるうちに元気になっていった。外で働けるなんて夢のような話だった。

半年頑張れば有給休暇が取れる。そうになったら月に一度有給休暇で病院に行ける。そう思っていた。ところが最初の二ヶ月は社長も休ませてくれたが、三回目には有給休暇を申し出た時に社長の態度が豹変した。「だから何の用があつて休むの!?!」「どこの何て

いう病院なの!? 何ていう病気で行っているの!?」と、社長は大声で怒鳴った。社員は私一人の会社。マンションの一室の狭いスペースで怒鳴る社長。どこのどんな病院に行こうが、それはプライベートなことである。執拗に聞くので心療内科に通っていることを伝えた。それに対して社長の反応はなかった。

とにかく休まずに仕事をすれば良い社員として扱われた。時代錯誤も甚だしい。こうして月に一度の有給休暇は、それ以降思うように取ることは出来なかった。いや殆ど取ることは出来なかった。とにかく重労働で毎日体は限界だった。気力だけで持っていた。休みの日はやっとの思いで家の掃除をして後は寝込んでいた。

仕事中に突然眩暈に襲われても必死に耐えるしかなかった。今に始まったことではない。希望を持って職に就けたのだ。働きに出たら出たでまた意地の悪い人もいるけどねと病院の先生は仰っていたが、案の定本当にその通りになってしまった。

「クーラーは七月一日から!」と言われ、梅雨時に窓を開けることも出来ず湿度が二十七度にもなった時は腸が煮えくり返った。また、冬は冬でヒーターは席を離れる時は消すようにと言われたが、うっかり消し忘れたら「なんで消さないんだ!」と怒鳴られもした。私は余りの寒さでコートを着て仕事をしていた。

何を頼むにも喧嘩腰でしかものを言わない社長。私物の整理など業務以外の事を押し付け、何かにつけて「金払ってんだから!」が口癖だった。やがて私は精神的にも肉体的にも限界になった。いや、今思うと限界はとくに超えていた。気力だけで何とか持っていたのだ。私は意を決して労働基準監督署に電話で相談した。すると、電話で済むような内容ではないのですぐ来てくださいと言われた。後日伺ったところ「決して高いとは言えない給料だね。パワハラだね」と言われた。勿論、高い給料ならパワハラはあっても良い訳ではない。月曜日から金曜日まで週五日、九時三十分から十七時迄の勤務で給料は十六万円だった。固定給ではなかった。私は労働基準監督署へ何度も足を運んだ。

そんなある日、突如として「今日仕事が終わったら三人で話し合しましょう」とプログラム開発の方の社長から言われた。私を解雇するつもりだなと私はピンときた。三人揃ったところでプログラムの方の社長がもう一人の社長に、まず私に謝意の言葉を述べて下さいと言った。三分も間があっただろうか。かなり長い沈黙が続いたが、取り合えずといった感じで社長は私に謝意の言葉を言った。もう一人の社長は、新しい人が来ても一年で辞めるだろうな。いや、一年もしないうちに辞めていくだろうねと言っていた。そして私にプログラムを覚えるよう言った。プログラム室の本棚に数多ある本を、一ヶ月で全部読んで覚えて下さいと言うのだ。

つまり今の仕事は辞めて、解雇にしない代わりにプログラムの仕事を与えるというこ

となのだ。死ぬ気でやればできると言われても、私だってそこで死にたくはない。それは無理なのを見越して言っているのだ。そして私が自分から辞めたいと言い出すのを待って、体良く追い出すつもりなのだ。私は少し考えさせて下さいと言った。

私の後任の人は既に募集済みで決まっていることを知った。こんなことは私に始まったことではないと、以前プログラムの方の社長から聞いていた。一体私で何人目なのだろうか。聞いてみたところで、そんな事は今更どうでも良いことだった。只、私の前に働いていた方は精神的におかしくなり、到底この先働くことはできない状態でいると以前プログラムの方の社長は話していた。一緒に仕事をしていた社長が急に機嫌が良くなり笑いながら「退職祝いをしようか」と私に言った。一体どこまで馬鹿にされているのか。

面接の時にはボーナスは十万円ですが出ますからということだったのに、とうとう楽しみにしていたボーナスは一度も出ることはなかった。プログラムに挑戦しようかとも思ったが、やはり私は辞める決心をした。先は見えている。その会社で採用された人は殆どの人が一年も持たずに辞めていったそうだ。私だって辞めたかったが自分から辞めるのだけは嫌だった。若ければとつくに辞めていた。採用されて仕事を始めてすぐ、ここは辞める時に一悶着ある所だと分かっていた。一悶着どころか辞めた後までが大変だった。労働基準監督署の担当の方にも、タチの悪い所に入っちゃったねと言われた。私に対してしてきたことは立派なパワハラで、月に一度の有給休暇も満足に取らせてくれなかった。会社は社員に有給休暇を与える義務があり、社員は有給休暇を取る権利があるのだ。

社長のパワハラによくも二年二ヶ月も耐えたものだ。ブラック企業だとは気付いていたが、ここまでだとは思っていなかった。私はただ、少しは人間扱いをして欲しかっただけだ。嘘はつかないで欲しかっただけなのだ。

私は退職後、眩暈が酷くなり日常生活を満足に送ることが困難となってしまい、六ヶ月間入院した。私の精神は既に蝕まれていたのだ。傷病手当を貰えるということになり手続きをするに当たって、その会社でまた更なる嫌がらせを受けた。結局、散々な思いをしたが傷病手当は貰えることになった。

十年経った今でもあの会社でのことを時折思い出すことはあるが、あの二年と二ヶ月は余りにも壮絶過ぎた。出向の方に、体を壊さないうちに辞めた方が良いですよと言われたが、本当にその通りになってしまった。我慢にもして良い我慢としなくても良い我慢があるし、限界を感じたらそこで辞めるべきなのだという事。それがあの会社で私が学んだ唯一のことだ。